

---

## 編集後記

---

昨年、診療報酬の大幅な改定がなされたために、透析施設の経営に支障をきたし、したがって医療の質の維持が困難になってきていることが推測される。しかしながら、各透析施設ではいろいろ工夫することにより経営を維持していることと考えられる。本号においても第10回目の透析医療費実態調査の報告が掲載されており、その実態が報告された。今後さらに透析患者の長期的病態にどのような影響が出てくるか長期的な調査が必要であるが、すでに透析時間区分の復活を望む要望が強く出ており、透析医会としても厚生労働省に対して働きかけを行う必要がある。医療経済の問題としては外国との国際比較の報告がなされている。毎年、開催されている透析医療における Consensus Conference の本年のテーマは、二次性副甲状腺機能亢進治療ガイドラインであった。K/DOQI から発表されている二次性副甲状腺機能亢進治療ガイドラインに対して、日本の透析患者に則した日本独自のガイドラインの提案がなされており、本号においてその作成における基本的根拠について解説がなされている。今後この治療ガイドラインにしたがって診療がなされ、日本における二次性副甲状腺機能亢進症に対する管理・治療が進歩することが期待される。なお、残念ながら昭和大学横浜市北部病院衣笠えり子先生の「管理手段」は論文未着のため今号に掲載することができなかったが、次号22巻2号（8月末発刊）に掲載を予定している。医療安全対策では今回は災害時の透析に必要な水対策に関する報告であり、今後各支部での災害時における水対策について検討しておくべきテーマである。実態調査としては高齢透析患者の心血管合併症のアンケート調査がなされて報告されている。今後、さらに高齢化が進むことが予測されており重要な問題である。臨床研究ではブラッドアクセスに関してインターベンションおよびシャント作成術、糖尿病性足病変の治療、栄養管理におけるNST、電子カルテの導入の功罪などそれぞれ大変興味がある報告である。各支部において特別講演が開催されており、それぞれ臨床現場で透析医会の会員のためになる講演がなされている。透析医のひとりごとではC型肝炎院内感染の制圧の成功のための苦労について述べられてあり、感染対策におおいに参考となる。本号も豊富な内容であり、透析医会の先生方の臨床に大いに参考になることを期待している。

広報委員 原田孝司